日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだい ニュース

第２２号
（２００１年１２月１５日）

熊本大会報告号

発行所：〒565-0871　吹田市山田丘１－２
大阪大学人間科学部　渥美公秀研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
電話＆Fax: ０６－６８７９－８０６６
発行人：堀毛一也　　編集担当：廣岡秀一

★★　第４９回大会が熊本大学にて開催されました　★★

10月27日（土）～28日（日）、日本グループ・ダイナミックス第49回大会が、篠原弘章先生を大会委員長として熊本大学黒髪キャンパスにて開催されました。

今回の大会では，ロングスピーチ４件，ショートスピーチ28件，ポスター発表44件、そして今大会の新しい試みであるEnglish　Sessionに11件の発表がありました。さらに、「Asia and Group Dynamics in New Century:Hearty Co-operation and Vital Action」「The concept of self, relationship, and achievement」「Dynamics of History」「学校教育とグループ・ダイナミックス」「日本人の自尊心と自己卑下」の５つのテーマでシンポジウムも開催されました。これらのシンポジウムは，海外からのゲストも交えたグループ・ダイナミックスの未来と過去および現在を見据えた国際的なテーマと，さらに教育問題，日本人の特性についての今日的なテーマでした。また，初企画として常任理事会の企画によるワークショップが２つ開催されました。話題提供者の健康上の理由により、予定されていたもう一つのワークショップが開催できなかったことはまことに残念でしたが、話題提供者となっていただいた先生方、本当にありがとうございました。

また、総会後に行われた名誉会員推戴式において、加納素朗先生、古畑和孝先生が、新たに名誉会員の推戴を受けられました。お二人の先生方のご功績と、長年にわたるグループ・ダイナミックス学会へのご尽力に改めてお礼を申し上げるとともに、心からお祝いを申し上げたいと思います。なお、お二人の先生からは、貴重な時間をいただいてご挨拶文を頂戴いたしました。次ページより、謹んで掲載させていただきます。

大会前日に開催された優秀論文選考委員会（村田委員長）において、40巻２号に掲載された矢守論文「社会的表象理論と社会構成主義－W.Wagnerの見解をめぐって－」が本年度の優秀論文賞に選考されました。総会後に行われた授賞式では、矢守先生には賞と賞金、およびAJSPへの掲載権が授与されました。矢守先生、おめでとうございます。

アジア社会心理学会が７月に開催されたこと、また、熊本という立地上のハンディキャップがあったにもかかわらず、比較的多くの参加者に恵まれ、充実した２日間を過ごすことができたように思います。

大会委員長の篠原先生を始め、大会開催にご尽力をいただきました熊本大学関係者のみなさまには、改めて厚く御礼申し上げます。

また、今大会の印象記を、久留米大学の原岡一馬先生、名古屋大学教育発達科学研究科の小川一美さんにお願いいたしましたところ、多忙な中にもかかわらず快くお引き受けくださいました。学会の将来構想がいろいろと議論されている中、この先の議論に非常に有益で示唆に富む内容の印象記をいただくことができました。後ほどご紹介したいと思います。諸先生方、ご協力ありがとうございました。

★★　私の集団力学入門　★★

名誉会員　　狩野　素朗

今回、名誉会員となったのを機に私と集団力学とのかかわりを振り返ってみたい。私は「集団力学」という研究分野があることを知って、それを専攻する学生となったのではない。学生時代(現在の教養課程)はコーラスの活動に没頭していた。一般合唱団、放送合唱団、学生の合唱団などなどである。そこでは団員、幹事、インスペクター、指揮などをつとめた。まさに節操もない重複集団所属であった。大学の学業集団が準拠集団でなかったことは確かであった。その当時、かかわっていたコーラスの中で、私にとって最も面白かったのは地域の公民館での「青年のつどい」のコーラスであった。「歌いたい人は誰でも気楽に参加してください」という自由参加の集まりだった。街角に手分けして張ったポスターを見て集まる人たちは年齢も職業も音楽経験もまちまちである。ただ共通しているのは「歌いたい」という気持ちである。このサークルに参加するのは自由だから、一度来てみて面白ければ次もくるし、面白くなければもうやってこない。そこでコーラスを存続させる絶対の要件は、いかにこの集団を面白くするかであり、そこで試行錯誤を重ねた。現在､凝集性論で集団の魅力の要因といわれるものの殆どはここで論議していたようである。このようなことに明け暮れていた結果、当時私が（大学で）所属していた理科に進学するための単位を落としてしまい、文科に進学することとなった。さて文科で何を専攻しようか?　とひろく資料を集めることにした。それを検討しているうち、コーラス運営の体験から人間の集まりをまとめていくことについての分野がないものか、と探した。そこで分かったのが「集団力学」という分野が教育学部の中にあることだった。これしかない、という気がしたものである｡そこで教育学部の編入試験を受けて幸いにも編入学を許された。このようにして、私ははじめて三隅二不二率いる集団力学の専攻生となったのである。集団力学演習で.はレヴィンの場の理論が取り上げられ、例の『社会科学における場の理論』がテキストに使われていた。1回の演習で1ページも進まない難しいものだったが、私にとってはそこに登場する概念の一つひとつがとても新鮮であり、また具体的なものとして感じられた。コーラスではメンバー一人ひとりの挙動やメンバーとメンバーとの関係が相互に関連し合って全体として一つの雰囲気ができる。一人のメンバーの挙動が全体の雰囲気を変える。つまり相互依存的な全体であり、それがレヴィンのいう「場」なのだと理解した。棒を振っているとき、その対象はメンバーたちの音声が織り成す一つの空間的な実体であると感じる。このような全体性の特徴を生み出す骨格が「構造」なのだと恩った。このようにレヴィンが心理学的空間（場）の状態とする概念が、まさしく現実の集団状況の特性を把握したものだと感銘したのを覚えている。私はその後、彼の著名な著書、論文集である4つの著書にのめり込み、その理解に挑戦したものである。そして３年間にわたる「青年のつどい」の運営をまとめたものが私の卒業論文の一つ『社会教育の場におけるコーラス活動のアクション・リサーチ』である。もう一つの卒業論文は、生意気にも『集団の位相空間論的（topological）研究法－K.LEWINの位相心理学に対する批判を含む－』というものだった。

このようにして私は集団力学研究に入門した。振り返ってみると自分の研究を進めることには苦労もあったが、学生や院生の研究の指導や研究合宿などの数々は実に楽しい思い出となっている。

諸々の理論を吟味、検討することで新たな研究のテーマを見出だすこともよいだろう。しかし理論的研究に行き詰まったら現実の世界に眼を向けて、それを率直に見つめることが有意義だと恩う。そこで自戒しなくてはならないことは、どうしても自分がもっている既成の集団力学の枠組みで見てしまうことである。その限りでは新しいものは見えない。そこに率直な目で見ることの難しさがある。

現実世界こそ理論研究にとって未知のことが蓄えられている宝庫である。そしてその宝庫には次々と新しいものが蓄えられているに違いない。集団力学を学ぶことによって私たちはその宝庫の扉を開くカギをもっているのである。

★★　名誉会員に選任されて　★★

名誉会員　　古畑　和孝

この度は、本学会第49回大会におきまして、名誉会員に選任していただき、大変光栄に、また恐締に存じております。実は、私には、未だ学半ばとの思いこそあれ、いわゆる古希に達したなどとの実感はほとんどございませんでした。しかし、客観的にみれば、人生の晩秋を迎えている現実を受容しなければなりません。

本学会に入会したのは、1964年秋、４年間に及んだ留学生活から帰国直後のことでした。大学卒業後すでに10年余経っておりました。同年輩の会員の方々の多くはすでに中堅としてご活躍中でした。殊に九大ご出身の先生方を中心とするご献身ご尽力は目覚しいものがありました。私はただ一会員として、その恩恵を享受するばかりでした。

とは申せ、学部学生時代からのめりこんでいた双生児研究で、その相互依存関係に着目したところから、助長的相互依存としての協同、妨害的相互依存としての競争に強い関心を抱き、留学中の博士学位論文研究にもそれは及び、対人魅力との関係での実験研究を行い、自覚的にグループ・ダイナミックス研究を強く志向するに到ってはおりました。通常は発達の領域で行われる家族関係のテーマに、当時隆盛となりつつあった認知的斉合性理論を背景に切り込んだ努力は、Newcomb, Janis, Zimbardo, Ausube1, Runkelなどの外国の研究者からは高く評価していただき、大いに励みとなったものでした。

「実験社会心理学研究」の創刊号に、私のICUの教え子の卒論の一部を掲載していただいたときには、密かに嬉しく思ったことでした。そうこうするうち、東大に全国初の社会心理学独立専修課程が創設され、助教授として赴任することとなりました。ICUの年少教授として、既に５年経過していました。その重責の中で、私は堅実な社会心理学徒の養成、輩出という課題に、微力ながら懸命に取り組む決心をしました。それまで東大出身の人の多くは、学会発表に慎重を期する傾向がありました。私は、社会心理学、グループ・ダイナミックスの共通の基盤を習得させる努力とともに、各白に独白のテーマを開発することを求めました。また、指導・助言はしても、私の名など一切だすに及ぱずということを徹底しました。その故もあってか、研究発表は活性化していきました。本学会誌に負うところも大きいものがありました。

1989年、第37回大会を東大で開催することとなった際、自分なりに努力をして、その12年前の第25回大会からすれぱ、少なくとも数倍の規模にすることが出来ました。人間関係の対極にあるともいえる、ロボットの世界一の会杜ファナックなどからまで協賛していただいたりもしながら。尤も武士の商法の悲しさ、それでも赤字に苦しんだりもしましたが。今となってみれば、すべては懐かしい思い出です。

本学会が新体制を迎える直前の1994年、二度目の編集幹事長を引き受けることとなりました。長く編集委員を務めた「心理学評論」で、わが国のオーソドックスな心理学では、初の「愛」の特集に意欲を燃やしたのを受けて、「魅力と愛の社会心理学」と銘打つことにしました。手足となる人が皆無の帝京大学で、ただ一人で苦闘しました。魅力と愛では、初の実証的研究が第34巻２号の中に結実したとき、密かに喜びを噛みしめました。優秀論文賞選考委員会などでも、ひたすら公正・無私だけを旨として臨みました。

学会に対して、たいした貢献など何も出来ませんでしたけれども、ただ学会の組織選挙、学会政治などには、終生全く無縁であり続け得たことだけは本当に感謝すべきことでした。21世紀を迎えて、本学会には幾多の課題があるようにも思われます。殊に何人もの有力会員の退会を招くに至った事態の吟味は必須かと愚考いたします。何卒よろしくお願い申し上げます。

至らぬ者にこのような栄誉をお与えいただき、重ねて感謝するとともに、学会の多くの方々の、多年にわたるご指導、ご鞭捷、ご厚情に改めて深謝するものです。学会が、諸課題を超克されて、益々発展されますようにせつに祈り上げます。まことに意を尽くしませんが、これをもってお礼の言葉とさせていただきます。

★★　*優秀論文賞受賞者スピーチ*　★★

40巻２号に掲載された矢守論文「社会的表象理論と社会構成主義－W.Wagnerの見解をめぐって－」が、本年度の優秀論文賞に選ばれました。矢守先生、おめでとうございます。矢守先生には喜びの声とご挨拶をいただきました。

◆◆◆　*矢守先生の受賞スピーチ*　◆◆◆

「優秀論文賞」を頂戴して～科研費申請書風　　奈良大学　　矢守　克也

この度は、拙稿に対して「優秀論文賞」を賜わり、誠にありがとうございました。以下、まず初めに、順不同になりますが、お世話になった方々に対して御礼を申し上げたいと思います。まず、拙論自体の執筆にあたっては、所属する奈良大学から研究資金、海外滞在の便宜をはかっていただきました。また、審査員の先生方からは、数々の示唆に富むコメントを頂戴し､それによって拙論が大いに改訂されたと存じます。さらに、Wagner先生（Johannes-Kepler University）には、論文執筆の契機を与えていただきました。次に、「優秀論文賞」につきまして、おそらくは御自身の研究哲学、あるいは、理論的基盤とは大いに背馳する論述を多分に含んでいるであろう拙論に対して、それでもなお評価を下さったことに対して、心より御礼を申し上げます。さらに、賞そのもの、とりわけ、AJSPへの翻訳・転載という制度を整えてくださった会長、常任理事をはじめとする先生方にも厚く御礼申し上げます。

というわけで、数多の感謝の念をこめまして、以下に、AJSPのことを念頭に、副賞として頂戴したお金の使途方針を記させていただき､本小文を閉じたいと存じます。

『まず、右肩に▼模様ですね。これって、新機軸ですね。でも、毎年のように、新機軸が盛り込まれるのは何故なのでしょう。ま、それはいいとして、研究種目は、基盤研究Ｇです。一応、グルダイのＧを戴いたつもりなんですけど。審査部門ですか。いつもと同じです。例の「文学、心理学・社会学・教育学・文化人類学、教育・社会系心理学（２２２）」です。研究代表者は、矢守克也。ハイ、判子も押しました（印）。年齢ねえ、もう39ですよ。長らく奨励でお世話になりましたが、もうダメですか。もう一声、40歳まで引き上げるってのは、いかがでしょう。所属機関・部局・職は、ご承知ですよね。研究課題は、「拙論：社会的表象理論と社会構成主義の改訂翻訳に関する一大事業」くらいでいかがですか。研究経費は、計100千円頂戴しました。内訳は、設備備品はなし。消耗品がパソコン関係、文具など10千円。そうそう、「英語論文に使う表現」みたいな本は、どの費目で買うんですか。消耗品に入れていいなら、それも加えて30千円にします。国内・外国旅費は要らないです。謝金は、重要です。ほらほら、この「外国語論文の校閲」っていう項目がピッタリです。50千円計上しましょう。そして、通信費やら近距離の交通費やらに20千円。こんなところでどうでしょうか。ええっと、それからページをめくって、と。研究目的ですね。①期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか、ですって。そんなの今から分かりませんよ。でも、そう言ってしまっては身も蓋もないでの、とりあえず、「社会心理学分野ではあまり知られていない社会的表象理論や社会構成主義について、従来の思考とどこがどう違うのかを明らかにして、生産的な議論、ひいては、相互補完関係を樹立すること」、こんなところでしょうか。②学術的な特色、独創的な点？我田引水みたいで嫌だなあ。ま、そう言いつつ、毎回、歯の浮くような言葉を並べ立てて自画自賛をするわけですが。③国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、か。ふぅッ…。もう、だいぶ疲れてきたんですけど。まだあるのかなあ。えッ、「従来の研究経過・研究成果または準備状況」だけで、２枚も…。「研究計画・方法」が１枚半、さらに、「研究業績」が２枚と。エライ厳しくなりましたなあ。でも、今回は、編集の廣岡先生から1000字でお願いします、ときつく字数制限を言い渡されましたので、これ幸いに、この辺で失礼します。ほんものをお書きになった皆さま、どうもお疲れさまでした（どうか、たくさん当たりますように)。』

★★　第４９回大会印象記　★★

日本グループ・ダイナミックス学会第４９回大会に参加して

久留米大学　　原岡　一馬

私が、第49回熊本大会に参加したのは、既に老化現象を呈し、研究についてout of dateの意識しかない自分を自覚しているので、もっと新鮮で、グループ・ダイナミックスの本質に迫る研究や意見が聞け、少しでも自己開発に役立つであろうと期待し、また、先輩や後輩たちとお会いできて楽しいひと時をすごすことができることを願って参加したつもりであった。

ところが、学会理事広報担当者から、学会に参加した感想を書いてくれとの依頼があって多少戸惑いを覚えた。現実に活躍されている会員に書いてもらった方が有益ではないかと思ったが、「若い人には別にお願いすることになっているから」という言葉を真に受けて、引き受けてしまったという次第である。

私自身がそうであったように、参加者にはそれぞれの学会参加の意味と期待があると思われる。たとえば、ここ数年間にわたって研究した結果を発表し学会で真価を問うてみたい、自分の研究の方向づけのヒントを得たい、新しい研究の流れを知りたいなどいろいろあろう。学会本部と当番校は、学会会員のこれらの期待と学会のこれからの方向付けを考慮してプログラムの内容をいろいろ検討するものと思われる。プログラムの内容と参加者の期待とがマッチすればその大会は良かったと評価され、食い違っていれば期待はずれだと評価されよう。

今回のプログラムは、どうであったろうか。第一に、アジア社会心理学会と日本グループ・ダイナミックス学会との合同学会ではないかという感がしたことである。特に１日目はその感が強かった。Englishセッションが日本語でのセッションと同じように組まれていたことと、3つのシンポジウムがすべて英語で行われたことからもそのことが言えよう。

国際化を目指した学会活動の必要性を強く意識し、このための計画であったに違いない。ただ、残念なことは、そこへの出席者が後のプログラムになるほど少なくなっていったことと、討議の深まりが少なかったことである。また、質問者も発表者も特定の人に限られていたことである。

今回は、企画者側の意図と参加者側の期待とがどれくらいマッチしていたであろうか。企画者側も参加者側もそれぞれ反省する必要がありそうである。

第二に、3つのワークショップが企画されていたことである。1つは、研究の国際化に向けて若手研究者の研修という意味があったものと思われ、特に、「研究法に関する基本姿勢」と「英語による学会発表」について計画されていたことからも推測される。講師の先生の一人が体調をくずされ中止せざるを得なかったことは残念なことであった。また、「研究者と現場：研究者に求めること」については、ワークショップというよりシンポジウムとして、いろいろな立場の研究者から検討してもらいたい問題であるように思えた。

第三に、ロング・スピーチをもっと増やしたらという気がした。ショート・スピーチやパネル発表の良い面もあるが、検討のための時間不足を感じることが多い。多年にわたる研究や体系付けられた研究をじっくり検討することも魅力あることである。ロング・スピーチが４つだけであったことはやや物足りない感じがした。

国際化と同時に、初期のグループ・ダイナミックスが取り扱っていたアクションリサーチとしての集団と個の関係の実践的研究とその理論化の方向づけに立ち返って見ることも大切ではないかと思った。

懇親会は楽しかった。当番校の配慮もあって、国際的な交流の場となると共に、年配者も若手研究者も一堂に集まって、その地方の名産の酒や料理を頂きながら語り合う楽しみは格別であった。

第49回日本グループ・ダイナミックス学会印象記

名古屋大学大学院教育発達科学研究科
小川　一美

初めての国内線、そして初めての九州地方。不謹慎な言い方かもしれないが、少しだけ旅行気分で挑んだ、今年の日本GD学会。産まれて初めて参加した学会は、広島大学で開

催された日本GD学会だった。あれから、はや（まだ？）６年。仮に６年前にこのような印象記を書かなければならないとしたら、これから書こうとするものとどのように違っていただろうか。６年で少しは視点が変わっているといいのだが…。こんなことなら６年前から印象記を書いておけば良かったと、少々残念な思いがする。

１日目。あれっ、国際学会？と錯覚してしまうほど、英語づけの一日だった。午前中は「English Session」、午後は二つの「シンポジウム」に参加したが、いずれも英語によるものだった。「English Session」では、もう少し内容的につっこんだ議論が展開できれば、さらに有意義なセッションになったのではないかという気がした。午後の「21世紀のアジアとグループ・ダイナミックス」というシンポジウムでは、グループ・ダイナミックスはどのような科学であると言えるのか、また、どのような科学であるべきかなど、（私にとっては）とても壮大なテーマについて考える機会を与えて頂いたように思う。

２日目。今回の大会で私が最も期待していた「若手研究者の研究スキルアップを目的とし、ゼミ形式による研究法の研修」が目的の「ワークショップ」が午前中に開催された。しかし、非常に残念なことに、自分の発表と時間が重なってしまい、途中からしか参加できなかった。自分の発表セッション終了後、吉田寿夫先生による「研究法に関する基本姿勢を問う」の会場にかけつけたが、正直、驚いてしまった。なぜなら、参加者の大半が、失礼かもしれないが決して若手とは呼べないような、ベテランの先生方ばかりだったからである。後半からしか参加できなかったものの、あらためて「基本」の重要性、そして「基本」の難しさ、奥深さを痛感することができた。「基本」または「基礎」イコール「容易」「当然」なのでは決してない。だからこそ、既に多くの研究を積み重ねてきたベテランの先生方が真剣な面もちで参加していらっしゃったのだろう。「若手研究者の・・・」という目的が掲げられていたが、「若手」という言葉は不必要だったのかもしれない。２時間という時間では短かった気さえするので、是非、２回目を別の機会に開催していただきたい。また、同様の目的で開催される予定だった山岸俊男先生による「英語による学会発表」というワークショップが、先生が体調を崩されたということで中止になってしまった。こちらのワークショップも是非、別の機会に開催していただけることを願っている。

＜ナカニシヤ出版の広告挿入＞

この常任理事会企画のワークショップは初企画であったとのことだが、もしかしたら、大会という場でそのような研修の機会を設ける必要があるのかという疑問や、マニュアル伝授的な（こうすればこうなる！というような）内容になるのではないかという危惧を持たれる方がいるのかもしれない。まだまだ私は多様な視点で学会という組織を見ることができないのであるが、若手の一人という立場からだけで思いを述べさせて頂くとすれば、今回のような研修を是非今後も続けていただきたい。勿論、マニュアル伝授的な内容の研修を期待しているのではない。大会という場で、他の会員の方々の研究内容だけでなく、日頃なかなか聞くことが出来ない研究者としての姿勢などについて知る機会、学ぶ機会を与えてもらえるならば非常に有り難いことだと思う。今回このような機会を与えて下さった常任理事の皆様、それから今大会の運営委員の皆様にあらためてお礼を申し上げたい。

最後になってしまったが、スタッフの学生さんたちが、すれ違う際にいつも笑顔で「おはようございます」「お疲れさまです」と声をかけて下さり、とても心地よい気分になったことを今でも覚えている。充実した二日間を過ごすことができたのも、運営に携わってくださった全ての方々のおかげである。心より感謝を申し上げて、印象記を終えさせていただく。

★★　*第５回常任理事会・第５回常任編集委員会議事録*　★★

日本グループ・ダイナミックス学会
2000年度 第５回　常任理事会・常任編集委員会（大会時）議事録
日時：2001年10月26日（金）
場所：熊本大学くすのき会館
出席者：堀毛・渥美・大渕・廣岡・山口
欠席者：松井・村田

＜北大路書房の広告挿入＞

常任理事会

【報告事項】

総務

三隅賞について、堀毛会長より、メルボルンで行われた選考の様子について報告があった。優秀論文賞については、堀毛会長より、村田常任理事が選考委員長に選出されたことが報告された。なお、優秀論文賞については、選考委員長の選出時期を早めることについて検討していくこととした。

広報

廣岡常任理事より、ぐるだいニュースの発行（21号まで）、および、ホームページの運用について、順調に進めていることが報告された。

将来計画

共催講座の開催結果について、資料（松井常任理事作成）をもとに堀毛会長から報告があった。なお、日本マーケティングリサーチ協会から当学会に50万円の寄付が確定していることが報告された。

AJSPの今後について、山口常任理事より、以下の３点について報告があった。

１．AJSPがSocial Science Citation Index (SSCI)に登録された。

２．メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項に基づいて、Blackwellと契約更改を進める準備を始めている。ただし、BlackwellがAJSPをオーストラリア支社担当に変更したことに伴って、交渉窓口が変更され、交渉開始が遅れている。常任理事会としては、できるだけ早く、アジア社会心理学会と協力し、有利な交渉を進めるよう山口常任理事に依頼した。

３．メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項に基づき、当学会から、associate editorとして山岸理事、consulting editorとして、唐沢理事、坂元理事、浦理事、矢守理事、結城理事、渥美常任理事、廣岡常任理事、松井常任理事、村田常任理事、大渕常任理事の10名が参画することになった。

渉外

堀毛会長より、日本心理学諸学会連合の現状として、臨床心理士制度の動向について、医学系（厚生省系）の資格との競合などの問題が議論されていることが報告された。

堀毛会長より、学術会議行動科学研究連合が学術会議と本学会が共同で主催するシンポジウムを開催して欲しいとの打診があったことが報告され、来年度の大会での実施に向けて取り組んでいくことを合意した。

会計・事務

事務局より、今年度の予算執行状況が報告され、健全であると確認した。

事務局より、会員異動について、９月末日現在、一般会員760名、学生会員59名、賛助会員4、名誉会員14であること、および、会費納入率が約80％であることが報告された。なお、今年度の入会は39件、今年度の退会28件であったが、会費未納者に督促しているため、若干名の退会が今後承認される見通しであることも報告された。会費未納者の退会については、書面により会費全納の督促を行った上で退会を承認していく方針を申し合わせたが、今後さらに取り扱いについて、“自然退会”（社会心理学会の制度）などの導入も検討していくこととした。

【審議事項】

2000年度決算案について、事務局から資料をもとに説明があり、監事２名による厳正な監査を受け、承認されたことが報告された。

2001年度予算案について、昨年度の総会で承認された2001年度暫定予算に、2000年度決算によって確定した繰越金を加算した案となっていることが、堀毛会長より説明され、了承された。

2002年度予算案について、堀毛会長より説明があった。続いて、事務局より、200万円

を超す次期繰越金の内訳が説明され、了承された。
会則等改正について、堀毛会長より趣旨が説明された。対象となった条項は、会則第９条・会則第10条・細則第３条・優秀論文賞規定・三隅賞規定である。これらのうち、優秀論文賞については、選考委員長の選出時期を明確に規定するかどうかが議論となり、結論を理事会に託すこととした。その他の条項については、原案通り承認した。
第50回大会開催について、堀毛会長より、2003年春に関西地区で開催することが提案され、了承された。なお、記念大会であるため、学会主催とすることとした。ただし、大会委員長については、堀毛会長という案、および、渥美常任理事という案が出され、理事会での議論を経て決定することとした。

将来計画
堀毛会長より、会費値下げに向けた方針が説明された。来年度は、繰越金に将来の値下げ分の金額を見積もっておき、その後の財政の安定を考慮して、できるだけ早急に2,000円程度の値下げを実施できるよう努力していくことを申し合わせた。
学会運営の中長期的な展望について、堀毛会長から提案があり、以下の点を来年度に集中的に議論していくこととした。
１．事務作業の一本化を推進する。中でも、委託事務、サーバー管理、オンラインジャーナルへの移行などを対象に、効率的な運営を図り、経費の節減に資するよう検討する。
２．学会誌名を変更する件について、従来からの議論を再度検討する。
３．会員制度の拡充を図る。
ただし、松井常任理事から提案のあった「研究委員会（仮称）」「倫理規定検討委員会（仮称）」など中長期計画のための委員会を設置する件については、どのような委員会を設置すべきかといった議論を深める必要があるとの意見があり、継続審議とした。ただし、委員会の設置を行う場合の経費については、予備費の中に予算化しておくものとした。
科学研究費申請について、事務局より提案があり了承された。具体的には、「実験社会心理学研究の出版助成」、「AJSPの出版助成」、さらに、「来年度の大会におけるシンポジウム開催助成」の３件である。

常任編集委員会

【審議事項】

堀毛会長より、実験社会心理学研究の投稿・審査状況について報告があり、41巻１号への掲載がまもなく決定される論文が複数あることを確認した。なお、現状では、投稿から掲載までに平均13ヶ月程度を要していることが指摘された。

以上

★★　*第３回理事会議事録*　★★

日本グループ・ダイナミックス学会
2000年度 第３回　理事会（大会時）議事録

日時：2001年10月26日（金）
場所：熊本大学くすのき会館
出席者：渥美公秀、福島治、古畑和孝、廣岡秀一、南博文、村田光二、永田素彦、中村完、沼崎誠、大渕憲一、斎藤和志、坂元章、浦光博、山口勧、矢守克也、八ッ塚一郎
欠席者：唐沢穣、松井豊、結城雅樹、大橋英寿、山岸俊男

【報告事項】

編集
堀毛会長より、実験社会心理学研究の投稿・審査状況について報告があり、41巻１号

への掲載がまもなく決定される論文が複数あることを確認した。なお、現状では、投稿から掲載までに平均13ヶ月程度を要していることが指摘された。

総務

堀毛会長より、三隅賞について、メルボルンで行われた選考の様子について報告があった。

村田優秀論文選考委員長より、今年度は、40巻２号に掲載された矢守論文が優秀論文賞に決定したとの報告があった。なお、優秀論文賞については、規定に時期を明示しないまでも、選考委員長の選出時期を早めるよう申し合わせた。

堀毛会長より、日本心理学諸学会連合の現状として、臨床心理士制度の動向について、医学系（厚生省系）の資格との競合などの問題が議論されていることが報告された。

堀毛会長より、学術会議行動科学研究連合が学術会議と本学会が共同で主催するシンポジウムを開催して欲しいとの打診があったので、来年度の大会での実施に向けて取り組んでいくことが報告された。

広報

廣岡常任理事より、ぐるだいニュースの発行（21号まで）、および、ホームページの運用について、順調に進めていることが報告された。なお、ぐるだいニュース等の電子化については、インターネットを積極的に使用していない会員への配慮を行うようにとの意見が出され、全会員が等しく情報を得ることができるように努めていくことが了承された。

将来計画

共催講座の開催結果について、資料（松井常任理事作成）をもとに堀毛会長から報告があった。なお、日本マーケティングリサーチ協会から当学会に50万円の寄付が確定していることが報告された。

AJSPの今後について、山口常任理事より、以下の３点について報告があった。

１．AJSPがSocial Science Citation Index (SSCI)に登録された。

２．メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項に基づいて、Blackwellと契約更改を進める準備を始めている。ただし、BlackwellがAJSPをオーストラリア支社担当に変更したことに伴って、交渉窓口が変更され、交渉開始が遅れている。常任理事会は、できるだけ早く、アジア社会心理学会と協力し、有利な交渉を進めるよう山口常任理事に依頼した。

３．メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項に基づき、当学会から、associate editorとして山岸理事、consulting editorとして、唐沢理事、坂元理事、浦理事、矢守理事、結城理事、渥美常任理事、廣岡常任理事、松井常任理事、村田常任理事、大渕常任理事の10名が参画することになった。

会計・事務

事務局より、今年度の予算執行状況が報告され、健全であると確認した。

事務局より、会員異動について、９月末日現在、一般会員760名、学生会員59名、賛助会員4、名誉会員14であること、および、会費納入率が約80％であることが報告された。なお、今年度の入会は39件、今年度の退会28件であったが、会費未納者に督促しているため、若干名の退会が今後承認される見通しであることも報告された。

その他

古畑先生から名誉会員への推戴を受けて理事を辞任したいとのお申し出があり、理事会で承認された。後任の理事の選任に関しては現在協議中。

【審議事項】

2000年度決算案について、事務局から資料をもとに説明があり、監事２名による厳正な監査を受け、承認されたことが報告された。

2001年度予算案について、昨年度の総会で承認された2001年度暫定予算に、2000年度決算によって確定した繰越金を加算した案となっていることが、堀毛会長より説明され、了承された。ただし、繰越金が増えたことは、実験社会心理学研究の印刷費が掲載論文の減少によって予算を大幅に下回ったことが理由であるため、望ましい結果ではないとの指摘があり、今後は、学会誌の充実と経費のさらなる節減を目指して努力

することを申し合わせた。
2002年度予算案について、堀毛会長より説明があった。続いて、事務局より、200万円を超す次期繰越金の内訳が説明され、了承された。
会則等改正について、堀毛会長より趣旨が説明された。対象となった条項は、会則第９条・会則第10条・細則第３条・優秀論文賞規定・三隅賞規定である。これらのうち、優秀論文賞については、選考委員長の選出時期を明文化することが改正の趣旨であったが、規定を変更するのではなく、できるだけ早い時期に選出を行うことを申し合わせるに留め、今回は改正しないことにした。その他の条項については、原案通り承認した。
第50回大会開催について、堀毛会長より、2003年春に関西地区で開催することが提案され、了承された。なお、記念大会であるため、学会主催とすることとした。議論の末、堀毛会長を大会委員長、渥美常任理事を準備委員長とし、総会に諮ることが了承された。

将来計画
堀毛会長より、会費値下げに向けた方針が説明された。来年度は、繰越金に将来の値下げ分の金額を見積もっておき、その後の財政の安定を考慮して、できるだけ早急に2,000円程度の値下げを実施できるよう努力していくことが報告された。
学会運営の中長期的な展望について、堀毛会長から提案があり、以下の点を来年度に集中的に議論していくこととした。
１．事務作業の一本化を推進する。中でも、委託事務、サーバー管理、オンラインジャーナルへの移行などを対象に、効率的な運営を図り、経費の節減に資するよう検討する。
２．学会誌名を変更する件について、従来からの議論を再度検討する。
３．会員制度の拡充を図る。
ただし、松井常任理事から提案のあった「研究委員会（仮称）」「倫理規定検討委員会（仮称）」など中長期計画のための委員会を設置する件については、常任理事会にて、どのような委員会を設置すべきかといった議論を深める必要があるとの意見があり、継続審議としていることが報告された。なお、委員会の設置を行う場合の経費として、予備費の中に予算化したことも併せて説明があった。
事務局より、来年度は、「実験社会心理学研究の出版助成」、「AJSPの出版助成」、および、「来年度の大会におけるシンポジウム開催助成」の３件について科学研究費を申請する計画があることが報告された。

以上

★★　２００１年度　総会議事録　★★

総会に先立ち、GD第49回大会委員長（篠原弘章先生）よりご挨拶があった。

【報告事項】

総務
堀毛会長より、細則第３条の改正＜資料１＞、三隅賞規定の追加を＜資料２＞の通り行うことが報告された。

編集
堀毛会長より、実験社会心理学研究の投稿・審査状況について、41巻１号への掲載がまもなく決定される論文が複数あること、現状では、投稿から掲載までに平均13ヶ月程度を要していることが報告された。また、AJSPについては、Vol4が順調に刊行されていることが報告された。
堀毛会長より、三隅賞について、メルボルンで行われた選考の様子について報告があった。
村田優秀論文選考委員長より、今年度は、40巻２号に掲載された矢守論文が優秀論文賞に決定したとの報告があった。

渉外・広報

廣岡常任理事より、ぐるだいニュースの発行（21号まで）、および、ホームページの運用について、順調に進めていることが報告された。なお、ぐるだいニュース等の電子化については、インターネットを積極的に使用していない会員に配慮し、全会員が等しく情報を得ることができる体制を作っていくとの報告があった。

堀毛会長より、日本心理学諸学会連合の現状として、臨床心理士制度の動向について、医学系（厚生省系）の資格との競合などの問題が議論されていることが報告された。

堀毛会長より、学術会議行動科学研究連合が学術会議と本学会が共同で主催するシンポジウムを開催して欲しいとの打診があったので、来年度の大会での実施に向けて取り組んでいくことが報告された。

事業報告

東洋大学の中里先生よりご挨拶とともに、第48回大会（於：東洋大学）の決算が報告された＜資料４＞。

共催講座の開催結果について、資料（松井常任理事作成）をもとに堀毛会長から報告があった。なお、日本マーケティングリサーチ協会から当学会に50万円の寄付が確定していることが報告された。

AJSPの今後について、山口常任理事より、以下の３点について報告があった。

１．AJSPがSocial Science Citation Index (SSCI)に登録された。

２．メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項に基づいて、Blackwellと契約更改を進める準備を始めている。ただし、BlackwellがAJSPをオーストラリア支社担当に変更したことに伴って、交渉窓口が変更され、交渉開始が遅れている。常任理事会は、できるだけ早く、アジア社会心理学会と協力し、有利な交渉を進めるよう山口常任理事に依頼した。

３．メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項に基づき、当学会から、associate editorとして山岸理事、consulting editorとして、唐沢理事、坂元理事、浦理事、矢守理事、結城理事、渥美常任理事、廣岡常任理事、松井常任理事、村田常任理事、大渕常任理事の10名が参画することになった。

引き続き、Uichol Kim,James Liu両氏から、本学会とアジア社会心理学会との関係について現状報告がなされ、両学会が連携していることの本学会員に対するメリットが具体的に提示された。主たる事柄としては、国際応用心理学会での共同企画、ニュージーランドでの英語研修プログラムの紹介と論文執筆補助の提案、次回のアジア社会心理学会大会のプログラムを共同企画することへの誘い、などであった。

事務局より、会員異動について、９月末日現在、一般会員760名、学生会員59名、賛助会員4、名誉会員14であること、および、会費納入率が約80％であることが報告された。なお、今年度の入会は39件、今年度の退会28件であったが、会費未納者に督促しているため、若干名の退会が今後承認される見通しであることも報告された。

将来計画

堀毛会長より、今後の大会を春期に開催する方針であることが報告された。

堀毛会長より、会費値下げに向けた方針が説明された。来年度は、繰越金に将来の値下げ分の金額を見積もっておき、その後の財政の安定を考慮して、できるだけ早急に2,000円程度の値下げを実施できるよう努力していくことが報告された。

学会運営の中長期的な展望について、より一層の会員サービスを行うため、以下の点を来年度に集中的に議論していくとの報告があった。

１．事務作業の一本化を推進する。中でも、委託事務、サーバー管理、オンラインジャーナルへの移行などを対象に、効率的な運営を図り、経費の節減に資するよう検討する。

２．学会誌名を変更する件について、従来からの議論を再度検討する。

３．会員制度の拡充を図る。

ただし、「研究委員会（仮称）」「倫理規定検討委員会（仮称）」など中長期計画のための委員会を設置する件については、常任理事会にて、どのような委員会を設置すべきかといった議論を深める必要があるとの意見があり、継続審議としていることが報告された。なお、委員会の設置を行う場合の経費として、予備費の中に予算化したことも併せて説明があった。

【審議事項】

2000年度決算案について、事務局から＜資料５＞をもとに説明があった。引き続き、内藤監事より、会計については、監事２名による厳正な監査を行い、妥当であると判断し承認したことが報告、承認された。
＜監査報告＞内藤監査より、業務監査結果が報告された。会員サービスの向上、アジア社会心理学会との連携によるメリットの顕示、関連他学会との魅力および内容面での差別化、などであった。それぞれの点について、常任理事会、理事会はさらに努力をしていくことが確認された。
2001年度予算案について、昨年度の総会で承認された2001年度暫定予算に、2000年度決算によって確定した繰越金を加算した案となっていることが、事務局から説明され、了承された＜資料６＞。ただし、繰越金が増えたことは、実験社会心理学研究の印刷費が掲載論文の減少によって予算を大幅に下回ったことが理由であるため、望ましい結果ではないため、今後は、学会誌の充実と経費のさらなる節減を目指して努力することが提案され、承認された。
2002年度予算案について、事務局より説明があった。200万円を超す次期繰越金の内訳も併せて説明され、了承された＜資料７＞。
会則等改正について、堀毛会長より趣旨が説明された。審議の対象となった条項は、会則第９条・会則第10条であり、原案通りの改正が承認された＜資料３＞。

2002年度事業計画案
以下の計画案が報告・説明され、すべて承認された。
１．実験社会心理学研究41巻を刊行する。
２．AJSPを刊行する。なお、契約更改については、山口常任理事、および、常任理事会が、会員に情報を開示しながら行うものとする。ただし、メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項等を本学会に不利な形で逸脱する場合には、臨時の理事会、総会を開くものとする。
３．第50回大会は、記念大会とし、2003年春に関西地区で開催する。なお、記念大会であるため、学会主催とし、堀毛会長を大会委員長、渥美常任理事を準備委員長として推進する。
４．会則第９条・会則第10条を資料の通り改正する。

名誉会員推戴式
狩野素朗氏、古畑和孝氏を名誉会員として推戴し、推戴式を執り行った。

優秀論文賞授賞式
矢守克也氏に優秀論文賞を授与した。メルボルンでのアジア社会心理学会との合意事項に基づき、当該論文は、AJSPに掲載可であることが告げられた。

以上

＜資料１＞

日本グループ・ダイナミックス学会会則細則　改正案

	改正前	改正案
第３条（役員の任期）	大会の主催者は、正会員の所属する組織を単位とし前年度の総会で決定する。	大会の主催者は、原則として正会員の所属する組織を単位とし前年度の総会で決定する。

附則
この改正会則細則は、2001年　月　日から発効する。

＜資料２＞

日本グループ・ダイナミックス学会諸規定　改正・追加案　三隅賞規定の追加（案）

追　加　案
三隅賞は、長きに渡って日本グループ･ダイナミックス学会の会長を務められ、アジアの社会心理学の発展に多大なる貢献をされた三隅二不二教授に敬意を表し、日本グループ･ダイナミックス学会とアジア社会心理学会が合同で設立したものである。本賞は、アジアの社会心理学に卓越した貢献をしたと看做された、 Asian Journal of Social Psychology掲載の論文の著者に贈られる。 [賞の承認] 本賞の承認は毎年行われる。賞、ならびに賞金1,000ドルの授与式は、隔年で開催されるアジア社会心理学会大会の場で行われる。 [三隅賞選考委員会] 選考委員会は5名の委員で構成される。そのうち3名は、日本グループ･ダイナミックス学会より、2名はアジア社会心理学会より推挙される。 [選考過程] 三隅賞の対象となるのは、前年に刊行されたAsian Journal of Social Psychologyに掲載された論文のうちの1本である。選考は以下の過程によって行われる。 (1) それぞれの委員が、賞の候補として2本以内の論文を推薦する。委員は、以下の2つの場合、その論文を推薦することができない。(a)委員自身、もしくは委員の指導する学生が著者の論文（「利益論文の葛藤」：CIPと省略)。(b)主たる著者が、既に前年の三隅賞を受賞している場合。 (2) 推薦された論文のリストが作成され、各選考委員に配布される。委員は、CIPを除外したそれぞれの論文を、5段階評定で評価する（5が最高点)。 (3) 推薦された論文の平均点のリスト(この際、論文の著者名とタイトルは伏せられる)が作成され、各委員に配布される。リストの作成は、日本グループ･ダイナミックス学会の事務局が実施する。 (4) 委員会は、最高3本の論文を、三隅賞の最終候補として選別する。この決定には、配布されたリスト上に記載された平均点のみが勘案される。 (5) 委員会は、最終候補となった論文について協議し、投票を行う。最終投票において、各委員は、CIPを除く最終候補論文について順位を付ける。最終投票において最高の平均点を得た論文が、三隅賞の対象として選ばれる。

＜資料３＞　　**日本グループ・ダイナミックス学会会則　改正案**

	改正前	改正案
第９条（役員の任期）	役員の任期は役員改選年度の大会終了の翌日より次期改選年度の大会終了時までの概ね２年とする。ただし、理事は会長在任期間を含む場合は引き続き３期、それ以外の場合は引き続き２期を超えてその任に留まることはできない。また、監査は引き続き２期を超えてその任に留まることはできない。	役員の任期は役員改選年度の翌年度より２年とする。ただし、理事は会長在任期間を含む場合は引き続き３期、それ以外の場合は引き続き２期を超えてその任に留まることはできない。また、監査は引き続き２期を超えてその任に留まることはできない。
第10条（運営）の４を追加		委員会 理事会は業務の運営に資するために、必要な委員会を設けることができる

附則
この改正会則は、2001年　月　日から発効する。

＜資料４＞

日本グループ・ダイナミックス学会第48回大会決算報告書

収入

参加費　239名			1,267,000
正会員予約参加	5,000×139名	(695,000)	
正会員当日参加	6,000× 65名	(390,000)	
臨時会員	6,000× 28名	(168,000)	
学生会員	2,000× 7名	(14,000)	
論文案　236冊			1,156,500
予約・掲載料	5,000×151冊	(755,000)	
当日購入	5,500× 55冊	(302,500)	
学会事務センター購入	3,300× 30冊	(99,000)	
懇親会等106名			454,000
一般予約参加	4,500× 32名	(144,000)	
院生・学生予約参加	3,000× 20名	(60,000)	
一般当日参加	5,000× 37名	(185,000)	
院生・学生当日参加	3,000× 17名	(51,000)	
弁当代(2日目)	700× 20名	(14,000)	
補助・協賛			670,000
学会本部より補助		(200,000)	
東洋大学補助		(300,000)	
広告・協賛		〈170,000)	
収入合計			3,547,500円

支出

印刷等		1,028,737
プログラム・論文集	(936,860)	
学会事務センター宛名ラベル等	(91,877)	
郵送料等		398,930
会場設営費等		262,154
パネルリース代	(232,229)	
休憩室喫茶代	(29,925)	
弁当代		290,000
懇親会経費		711,900
アルバイト代等		792,000
大会委員会会合費		37,590
事務雑費		26,189
支出合計		3,547,500円

目本グループ・ダイナミックス学会第48回大会の収支を以上の通り報告いたします。

2001年10月27目　　第48回大会委員長　中　里　至　正

＜資料５＞

日本グループ・ダイナミックス学会2000年度決算報告書

【収　入】

	2000年度予算	2000年度決算
会　費	9,390,000	9,604,125
一般会費	7,800,000	8,023,800
学生会費	240,000	256,000
賛助会費	100,000	80,000
入会金	50,000	49,950
雑誌定期購読	1,200,000	1,194,375
雑誌超過頁個人負担分	300,000	210,000
分冊売上	50,000	125,772
文部省科学研究費補助金	300,000	0
広告収入	150,000	125,000
雑収入	10,000	337
名簿作成積立金繰入	700,000	700,000
小　　計	10,900,000	10,765,234
前期繰越金	-318,145	-318,145
合　　計	10,581,855	10,447,089

【支　出】

	2000年度予算	2000年度決算
実験社会心理学研究	2,896,000	1,547,845
印刷費	2,500,000	1,310,400
送料	96,000	93,200
編集業務通信費	300,000	144,245
ＡＪＳＰ	3,284,000	3,424,595
購入費	3,120,000	3,020,475
送料	144,000	404,120
編集業務通信費	20,000	0
ニュースレター	456,000	254,440
印刷費	200,000	125,790
送料	256,000	128,650
優秀論文賞賞金	165,000	200,000
賞金	150,000	200,000
事務・雑費	15,000	0
名誉会員推戴関係費	20,000	0
地域別合評会補助金	50,000	0
大会助成金	200,000	200,000
ホームページ管理費	60,000	45,000
事務費	1,765,000	1,698.016
事務委託費	1,300,000	1,454,691
通信・交通費	150,000	132,902
事務雑費	15,000	14,303
人件費	300,000	96,120
理事会費	550,000	545,640
名簿作成・理事選挙積立金	950,000	1,083,430
名簿作成費	800,000	800,090
理事選挙費	150,000	283,340
心理学諸学会連合会費	20,000	20,000
雑費	50,000	53,489
予備費	20,000	0
小計	10,486,000	9,072,455
次期繰越金	95,855	1,374,634
合　　計	10,581,855	10,447,089

会　計　監　査　報　告

監査の結果正確、妥当であると認める。

内藤　哲雄　　印
相川　充　　印

＜資料６＞

日本グループ・ダイナミックス学会　2001年度予算案

【収入】	2001年度予算
会費	9,150,000
一般会費	7,440,000
学生会費	400,000
賛助会費	80,000
入会金	30,000
雑誌定期購読	1,200,000
雑誌超過頁個人負担分	400,000
分冊売り上げ	50,000
広告収入	150,000
雑収入	10,000
科学研究費補助金	0
前期繰越金	1,374,634
合計	11,134,634

【支出】	2001年度予算
実験社会心理学研究	2,397,200
印刷費	2,000,000
送料	97,200
編集業務通信費	300,000
AJSP	3,071,800
購入費	2,916,000
送料	145,800
編集業務通信費	10,000
ニューズレター	459,200
印刷費	200,000
送料	259,200
優秀論文賞	110,000
賞金	100,000
事務・雑費	10,000
名誉会員推戴関係費	20,000
地域別合評会補助金	30,000
大会助成金	200,000
ホームページ管理費	60,000
事務費	1,910,000
事務委託費	1,400,000
通信・交通費	140,000
事務雑費	20,000
人件費	350,000
理事会費	550,000
心理学諸学会連合会費	20,000
名簿作成・理事選挙積立金	700,000
雑費	50,000
予備費	20,000
次期繰越金	1,536,434
合計	11,134,634

＜資料７＞　日本グループ・ダイナミックス学会　2002年度予算案

2002年度予算案

【収入】

	単価	人数	
会　費			**9,180,000**
一般会費	12,000	620	7,440,000
学生会費	8,000	50	400,000
賛助会費	20,000	5	100,000
入会金	1,000	40	40,000
雑誌定期購読			1,200,000
雑誌超過頁個人負担分			**300,000**
分冊売上			**50,000**
広告収入			**150,000**
雑収入（利息など）			**10,000**
名簿作成積立金繰り入れ			**700,000**
前期より繰り入れ			**1,536,434**
科学研究費補助金			**800,000**
共催講座			**300,000**
合計			**13,026,434**

【支出】

	単価	回数	人数	
実験社会心理学研究				**2,397,200**
印刷費				2,000,000
送料	60	2	810	97,200
編集事務費				300,000
AJSP				**3,796,750**
購入費(34ドル×130円/ドル)	4,420	1	810	3,580,200
送料	85	3	810	206,550
編集事務費				10,000
ニュースレター				**459,200**
印刷費	50,000	4		200,000
送料	80	4	810	259,200
優秀論文賞				**110,000**
賞金				100,000
事務・雑費				10,000
名誉会員推戴関係費				**20,000**
地域別合評会補助金				**30,000**
大会助成金				**300,000**
ホームページ管理費				**60,000**
事務費				**1,910,000**
事務委託費（学会事務センター）				1,400,000
通信・交通費（学会事務センター）				140,000
事務雑費（学会事務センター）				20,000
人件費（事務局）				350,000
理事会費				**550,000**
心理学諸学会連合会費				**30,000**
名簿作成・理事選挙費				**1,100,000**
(仮称)研究委員会				**100,000**
雑費				**57,884**
予備費				**20,000**
次期繰り越し				**2,085,400**
				13,026,434

★★　アジア社会心理学会よりのご挨拶　★★

アジア社会心理学会会長　山口　勧

熊本大学での総会においてAsian Journal of Social Psychology(AJSP)の共同刊行継続をご承認いただきありがとうございます。AJSPの刊行継続にとって皆様のご支援が非常に重要なことは今さら申すまでもありません。アジア社会心理学会(AASP)を代表して今回のご承認に対して御礼申し上げます。現在、総会でのご承認を受けて、契約更改についてのBlackwellよりの提案を求めているところです。総会でご承認いただいたような条件で契約更新を行い、皆様のご期待に沿えるように努力してまいりますので、引き続きよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

皆様のおかげでAJSPおよびAASPは順調に発展しておりますので、この機会に良いニュースをお伝えしたいと思います。まず、AJSPは本年の第四号よりSocial Science Citation Index(SSCI)に掲載されることが決定しました。SSCIにはどのジャーナルでも掲載されるというわけではありません。ある程度の影響力が確認されるまでは掲載されないため、AJSPも発刊後三年間ほどの間審査を受けていました。多くの国では、SSCIに掲載されているジャーナルが「一人前」のものと認知されておりますので、このたびAJSPのSSCI掲載が決定したことにより、AJSPの国際的な評価も高まると確信しております。なお、すでにPsychInfoなどには掲載されておりますので、これでAJSPはすべての主要なデータベースに掲載されることになります。

次に、AASPとアメリカのSociety for Experimental Social Psychology(SESP)との間で協力関係についての話し合いが進行中です。すでにSESP側では、依頼があれば、ボランティアのSESPメンバーが非英語圏の研究者の英語論文をチェックするという案が承認され、ワシントン大学のGreenwald教授がそのSESP側窓口として活動を始めています。AASP側は、Emiko Kashimaさんが担当し、現在具体的な手続きの詰めを行っている段階です。GD会員の皆さんは、希望されればAASPの会員として無料で登録ができますので、AASPを通して英語論文の校閲をSESP会員にお願いできる道が開かれることになります。

最後に、メルボルン大会のご報告ですが、240名の参加申し込みのうち111名が日本人からのものであり、その多くはGDの会員の方でした。また、Progress of Asian Social Psychologyの第4巻には31の投稿があり、そのうち18は日本人の論文でした。やはり日本人投稿者の多くはGD会員の方々です。このように名実ともにGD会員の皆さんがアジア社会心理学会の中核となって活動を始めてくださっていることを大変嬉しく思います。

今後ともGDとAASPが手をたずさえて発展していくことを心より願っております。

★★　実験社会心理学研究　第４１巻１号掲載決定論文　★★

＜一般論文＞

【原著論文】

矢守　克也　　社会的表象としての「活断層」－内容分析法による検討－

小杉　考司・藤澤　隆史・石盛　真徳・水谷　聡秀　　ダイナミック社会的インパクト理論における意見の空間的収束を生み出す原因の検討

戸塚　唯・早川昌範・深田博己　環境ホルモン対処行動意図に影響を及ぼす要因の検討－防護動機理論の枠組みを用いて－

田鍋　佳子　集団内における自己の勢力認知が内集団変動性知覚に及ぼす効果

【資料論文】

安達　智子　　就業動機尺度の概念妥当性－動機・自己効力感との関連について－

中丸　茂　　文化心理学と随伴性－随伴性の心理学からの提言－

（４１巻１号は、２００１年１１月発行予定でしたが、編集作業が遅れており、１２月発行になる予定です）

★★　会長からのお知らせ　★★

まずもって、49回大会の運営にご苦労賜りました熊本大学のスタッフの皆様に、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。さて、熊本大会時に開催されました総会への出席者数は、残念ながら全正会員数の過半数には達しませんでした。したがって、規定により「仮総会」

となっています。仮総会での決議は効力を発するのは、学会会則細則第11条に、「仮総会の場合には、その決議事項を全会員に通報し、その後１月以内に会員総数の過半数が文書によってこれに反対しないときは総会の決議としての効力を発するものとする。」と規定されています。遅くなりましたが、このぐるだいニュース第22号の発行をもって全会員への通報に代えさせていただきます。

★★　共催講座の開催報告　★★

９月28日東京グリーンホテル・水道橋にて、日本マーケティングリサーチ協会との共催で、「消費者のブランド戦略の心理学」が開催されました。出席者は71名でした。各講演の次第は下記の通りです。

竹村和久氏　消費者の価値判断とブランド戦略
杉本徹雄氏　消費者のブランド志向の心理　　（非会員）
丸岡吉人氏　消費者の価値意識とブランド戦略
秋山学　氏　家族の購買意思決定とブランド戦略

講座の企画は常任理事会で行いました。この講座の収入から、本学会に50万円が振り込まれました。

★★　事務局からのお願い　★★

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集
事務局では、実験社会心理学研究の特集号テーマを随時募集致しております。詳細は事務局までお問い合わせください。

◆実験社会心理学研究の書評候補募集
事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

★★　広報担当からのお知らせ　★★

◆広報担当は、新刊本に関する情報を広く募集しています。グルダイ会員に紹介したい書籍がありましたら、広報担当までご推薦ください。

◆ホームページは http://wwwsoc.nii.ac.jp/jgda/ です。なお、このページに関するご意見・ご要望は、広報担当常任理事の廣岡（三重大学：shuhiro@edu.mie-u.ac.jp）もしくはHP担当幹事の三浦（大阪大学：asarin@syasin5.hus.osaka-u.ac.jp）までお知らせください。

★★　グルダイ学会関係連絡先　★★

◆投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見◆
岩手大学人文社会科学部　堀毛研究室
〒020-8550　岩手県盛岡市上田３－１８－３４　岩手大学人文社会科学部
電話・Fax：019-621-6842　E-mail：kekehori@iwate-u.ac.jp　QGB03376@niftyserve.or.jp

◆学会事務局◆
大阪大学人間科学部　渥美公秀研究室
〒565-0871　吹田市山田丘１－２　　大阪大学人間科学部
電話＆Fax:06-6879-8066　　E-mail：CXC02237@nifty.ne.jp

◆ニュースレター（ぐるだいニュース）の編集・記事の投稿◆
三重大学教育学部　廣岡研究室
〒514-8507　三重県津市上浜町１５１５　三重大学教育学部
電話・Fax：059-231-9329　E-mail：shuhiro@edu.mie-u.ac.jp

◆メールマガジン（JGDA_Flash）へのニュース記事投稿◆
新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報など、を募集しています。
E-mail：jgda_flash@epsycho.edu.mie-u.ac.jp　までお送りください。
また、登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

◆住所・所属変更
日本学会事務センター大阪事務所（学会センター関西　担当：山田範子）
〒565-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
TEL　06-6873-2301　FAX 06-6873-2300　E-mail：nyamada@bcasj.or.jp

ーーーーーSPSS社広告挿入ーーーーー